

碑文めぐり



1 少くして学べば、則ち壮にして為す有り。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。
【言志晩録六〇条】

子どもの時学んでおけば、壮年になってそれが役立つ、何事か行うことができる。壮年の時学んでおけば、老年になっても気力が衰えない。老年になっても学んでいれば、死んでもその名や精神は朽ちることはない。

2 人は当に自ら吾が心を礼拝し、自ら安否を問うべし。(吾が心は即ち天の心、吾が身は即ち親の身なるを以てなり。是を天に事うと謂い、是を終身の孝と謂う。)
【言志晩録一七七条】

私たちは、常に自分の心を拝み、自分の心が健全であるかどうか尋ねるべきである。それは我々の心は天より与えられた心であり、我々の体は親から与えられた体であるからである。このように、自らの心を確かめていくことを、天に仕える道といい、生涯の孝という。

3 春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら肅む。
【言志後録三三三条】

春風のようにやさしく人に接し、秋の霜のように鋭さをもって自分には厳しく。

4 怠惰の冬日は、何ぞ其の長きや。勉強の夏日は、何ぞ其の短きや。長短は我れに在りて、日に在らず。(待つ有るの一年は、何ぞ其の久しきや。待たざるの一年は、何ぞ其の速やかなるや。久速は心に在りて、年に在らず。)
【言志叢録一三九条】

怠けているときは、短い冬の日も何と長いのだろうと感じる。一生懸命物事に励む時は長い夏の日も何と短いのだろうと感じる。長い短いは自分の主観にあるのであって日にあるのではない。(同じように、何か待つことのある一年は、何とまあ長いことか。待つことのない一年は、何とまあ短いことか。遅い、速いは主観にあるのであって時間にあるのではない。)

5 石重し。故に動かず。根深し。故に抜けず。人は当に自重を知るべし。
【言志晩録二二二条】

石は重く動かない。大木は深く根をはって抜けない。私たちは他から軽々しく動かされないような自分になければならない。

6 身には老少有れども、而も心には老少無し。気には老少有れども、而も理には老少無し。(須く能く老少無きの心を執りて、以て老少無きの理を体すべし。)
【言志叢録二八三条】

人の体には老人と少年の別はあっても、心には老少はない。体の動きには老少があっても、道理には老少はない。老若にかかわらず、永久に変わらない道理を体得しなければならぬ。

7 凡そ教えは外よりして入り、工夫は内よりして出づ。内よりして出づるは、必ず諸れを外に験し、外よりして入るは、当に諸れを内に原ぬべし。
【言志後録五条】

おおかたの場合、教えは外部から入ってくるものであり、工夫は自分の内部から考え出すものである。自分で考えたことは、必ず外部で正しいことを検証し、また、外部からの教えは、自分でその正否を検討すべきである。

8 一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只だ一燈を頼め。
【言志晩録一三三条】

一張りの提灯をさげて夜道を行く。夜道が暗くても心配するな。ただその一張りの提灯の明かりを頼りに行けばよい。

9 (色の清き者は観る可し。声の清き者は聴く可し。水の清き者は漱ぐ可し。風の清き者は当る可し。味の清き者は嗜む可し。臭の清き者は臭ぐ可し。凡そ清き者は皆以て吾が心を洗うに足る。)
【言志叢録二八二条】

色の清らかなものは観るのによい。声の清らかなものは聴くのによい。水の清いものは口を漱ぐのによい。風の清いものは吹かれるのによい。味の清いものはたしなむのによい。香りの清いものはかぐのによい。すべて清らかなものは我々の心を洗い、すがすがしくしてくれる。

10 太上は天を師とし、其の次は人を師とし、其の次は経を師とす。
【言志録二条】

最も優れた人は宇宙の真理を師とし、次に優れた人は立派な人を師とし、第三等の人は経典を師とする。

11 養生の工夫は、節の一字に在り。
【言志晩録二八〇条】

養生の工夫というものは、「節」の一字である。物事すべて過度にならず、節度を守ることにある。

12 一藝の士は、皆語る可し。
【言志録六一条】

何が道でも、達人はその道を語ることができる。「芸に秀でた人たちは、他の分野の秀でた人たちと語り合い理解しあえるものだ。

13 清忙は養を成す。過閑は養に非ず。
【言志叢録三二二条】

すがすがしい忙しさは養生になる。暇すぎるのは養生にならない。

14 人は須らく忙裏に間(閒)を占め、苦中に楽を存する工夫を著くべし。
【言志叢録一一三条】

人は忙しさの中にも静かな時のような心をもたなければならぬ。苦しい時には、楽しい時の心になる工夫をしなければならぬ。

15 已むを得ざるに薄りて、而る後に諸を外に発する者は花なり。
【言志録九二条】

準備万端整えば花は咲かざるを得ない、自分の為に。人も成長すれば必ず与えられた義務を果たさねばならない。一生懸命それに励むとき、これは美しい花だと人が認める。

佐藤一斎は、一七七二年(安永元年)、岩村藩家老の二男として生まれ、儒学を修め、七十歳のとき、昌平坂学問所の儒官となった。門下生は三千人にも及び、佐久間象山(松代藩)、山田方谷(備前松山藩)、渡辺華山(田原藩)などから、のちの明治維新を導いた勝海舟、坂本龍馬、吉田松陰などの幕末の志士たちにも多大な影響を与えた。西南戦争に敗れた西郷隆盛が島流しにあつた獄中で座右の銘とした言志四録(「言志録」・「言志後録」・「言志晩録」・「言志叢録」)から一〇一条を選び筆写した「手抄言志録」は、その後、西郷を最も信頼していた明治天皇に献上され、「朕は再び朕の西郷を得たぞ!」と叫んだと言われる。言志四録は、佐藤一斎から西郷隆盛へ、そして明治天皇へと受け継がれ、今もなお多くの人々の愛読書として引き継がれている。